



▲入居が始まった香里団地（昭和33年）。



▶建て替えられ高層化した団地。

今

▶米国司法長官ロバート・ケネディ夫妻も訪れました（昭和37年）。



「東洋一」と言われ、ケネディの弟も訪れた

香里団地

台所と言えば土間が主流であった昭和30年代、ステンレスの流し台や水洗トイレ・ガス風呂といった最新設備を備えた団地は庶民の憧れで、「団地族」という流行語も生まれました。

旧陸軍の火薬製造所があった場所に日本住宅公団が昭和31年から開発を始めた香里団地は、総面積139万平方メートル、5214戸の規模を誇り、団地内に、市役所の支所、郵便局、診療所、市場など生活に密着した施設や広い緑地がある郊外型団地のモデルとなりました。

「東洋一のマンモス団地」として注目され、昭和37年には、ケネディ大統領の弟で当時の司法長官ロバート・ケネディ夫妻も視察に訪れました。夫妻は開成小学校を訪問し、にこやかに子どもたちの握手に応じました。当時同校で教師をしていた三好園子さん（80歳・茄子作在住）は、「報道陣がたくさん来て大騒ぎでした。子どもたちの米国歌の演奏に直立不動で胸に手を当てている姿を見て、真摯な姿勢を感じました」と印象を語ります。

かつて火薬工場があった香里の地に団地が誕生したのは、平和を願う市民の運動が実ったからです。完成から約半世紀が経ち、一部建物が建て替えられるなど少しずつ変わってきた香里団地ですが、今もここでは、子どもからお年寄りまでが広々とした公園に楽しそうに集い、平和な生活を営んでいます。

（平成23年3月号）